

幼児に信頼される保育者

岡田 正章

学生に「今まで教わった先生のなかで、どんな先生がいい先生だったか」とたずねると、多くの学生が「話をよく聞いてくれる先生」と答えた。逆に「嫌な先生」は「自分の方から言うだけで、自分の話を聞いてくれない先生」「えこひいきをする先生」という答えが多かった。

先生も一人の弱い人間であるから、どこかに欠けたところのあることはやむを得ない。しかし、子どもを自分の好悪で差別する「えこひいき」をする先生がいることだけは、ある子どもを絶対にだめにし

てしまうものとして断固認められないはずのものである。

学生は「信頼される先生」の一つの属性として「えこひいきをしない先生」を挙げている。これは、小学生以上の子どもに対する関係とは限らない。どの子どもからも親しみのある先生として受け入れられているだろうか。常時、自己の言動を反省したい。

新幼稚園教育要領・新保育所保育指針は何れも旧のものに書かれていなかったが、保育の基本原則として、保育者が子どもとの間に十分な信頼関係を築くことを明記している。

これは、従来の保育においても当然のことであったはずである。そのことが敢えて今回の両者に明記されたのは、これまでの保育実践において不十分であったことよつたのであろうか。保育にかかわるものの自己洞察が必要であらう。

保育実習を終わった学生に、「子どもから信頼される保育者とは」と自由記述されたものから、純粹・新鮮・真剣さにもとづくものとして多くの示唆を受けた。その一端を記し、改めて自己自身への問いとしての資としてみたい。

○子どもの言うてくることを真剣に聞き、受けとめる。できるだけ「後でね」と言うことを少なくする。

○子どもをしていることをよく見つめ、適切に認めたり、励ましたりする。たとえば子どもの遊んだり仕事をしている姿を遠くから見ているときでも、子どもがなし遂げて保育者の近くにやってきたならば、「面白かった！よくやったね！」などと言葉をかけることは、子どもに先生のやさしさを感じさせ、心と心の結びつきを太いものにする。

○子どもに保育者の方から話しかける。単に指示や禁止でなく、また、二人以上の子どもに対する言

葉だけでなく、一人一人に対し、その子どもの気持ちを大切に話しかけをする。それは、子どもに心理的負担とならないものであり、保育者が自分のことをわかってくれていると感ずることのできるようなものでなければならない。

そのほか、笑顔、スキンシップを大切に、子どもと交わした約束を必ず守る、子どもが困っているときは援助する、子どもの喜び・悲しみを共感する、子どもすることに感動できるなどと、ともしればマンネリ化のなかで見失い、怠っていることを見つめなおし、真に子どもたちから信頼される保育者ばかりの幼稚園・保育所となつてほしい。

愛情をもつ、子どもを人間として信頼するなどの抽象命題とともに、その具体的な方に向ら律することを自らの課題とすることが必要である。

(明星大学)